

琉球波照間方言の助数詞：その形態と意味 構造

大野, 眞男

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

14

(開始ページ / Start Page)

107

(終了ページ / End Page)

117

(発行年 / Year)

1990-03-08

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012637>

琉球波照間方言の助数詞

— その形態と意味構造 —

大野真男

1. 事物の数え方

波照間方言における事物の数え方の表現には次の3通りの形式が存在する。

- 1) 基数詞による
- 2) 数を表す形態+名詞による
- 3) 数を表す形態+助数詞による

本論においては、3) の〈数を表す形態+助数詞〉により数量表現をするものの記述を主たる目的とするが、1) 2) の数え方も本土方言などと対比して特徴的であるので以下に記述する。

1) の、「一つ、二つ、三つ・・・」のように〈基数詞〉により数量表現をするものは、本土方言（あるいは共通語）と比較してその数が多く、次のようなものが調査で確認された（注1）。

dzubagu (重箱) ko:si (菓子) sinu (着物) sikubi (帯) tabi (足袋)
 katsa (笠) futsi (櫛) katsa (蚊帳) nin (荷) katana (包丁) kansuri
 (剃刀) bunu·jusi (斧) patsan (鋏) ko:ri (香炉) nabaku (衣類入れの箱)
 sudzuri (硯) hakimun (掛軸) ?udzu (布団) sana (傘) kanggan (鏡) sanjin (三味線)
 pata (旗) sumutsi (書物) figami (手紙) tjo:men (帳面) ffa (倉) june
 (畝) sakasiki (杯) wa:·jama (拝所) busi (竹の節)

なお波照間方言の基数詞 cardinal number は次のようである。

pitu:tsi (一つ) futu:tsi (二つ) mi:tsi (三つ) ju:tsi (四つ) ?issi (五つ)
 nntsi (六つ) nanatsi (七つ) ja:tsi (八つ) hakonatsi (九つ) tu: (十)
 tu:pitu:tsi (十一) tu:futu:tsi (十二) tu:mi:tsi (十三) tu:ju:tsi (十四)
 tu:issi (十五) …… nindzu (二十) nindzupitu:tsi (二十一) …… sandzu (三十)
 sindzu (四十) gundzu (五十) rugudzu (六十) nanadzu (七十) patsidzu
 (八十) kundzu (九十) pja:gu (百) nipja:gu (二百) sambja:gu (三百) ……
 jin (千) …… man (万)

また「ひい・ふう・みい・・・」に当たる言い方として、一から十までは次のようにも数える。

di: (一) ta: (二) mi: (三) ju: (四) ?isi·?itsi (五) mu: (六)
 nana (七) ja: (八) hakona: (九) tu: (十)

2) の、〈数を表す形態+名詞〉により数量表現をするものは、例えば花について示すならば、

pitupana (一輪<一花>)、futapana (二輪<二花>)、pananu mi:pana sakjan (花が三輪<三花>咲いた)のように、本来は数える対象を言及する実質名詞を助数詞的な位置に転用しているものである(注2)。このような類としては次に示すようなものが確認された。

pana (花) pa: (葉) nin (根) kini (世帯) pe: (鍬) sitari (蜜柑の房)
busi (竹の節) d3in (膳)

これらの他に、pitu (人)についても、4人までは{ri}という助数詞を用いるが、5人以上になるとpituが助数詞的に使われる。

このようなケースにおいて実質名詞に結びついて数量表現をする、数を表す形態は、以下に示すようである。またこれらの形態は、後述する助数詞に結びついて数量表現をする形態でもある。

pitu- (一) ruta- (二) mi:- (三) ju:- (四) ?isi-?itsi- (五) nn-•mu- (六) nana- (七) ja:- (八) hakona:-•hakona- (九) tu:-•tu- (十)

2. 助数詞の分類

言語の文法は一般的に特定の概念範疇を反映しているといわれる。また多くの言語では、物を数える形式は、数える対象の事物の分類 classification と関連している。本論で扱う助数詞 numeral classifier を含めて類別詞 classifier languages 一般においては、複数の名詞が特定のカテゴリーのもとにマークされている。そのような言語の文法的仕組みの分析を通して、その言語主体の概念範疇の構造を理解する際の重要な手がかりが与えられると考えられる(注3)。

助数詞 numeral classifiers は、事物を数えるときに、数詞 numeratives とともに、対象の事物を指示する名詞に伴って用いられる語類と考えることができる(注4)。日本語の助数詞の考察に際して、Sanches (1977)・Berlin & Romney (1964)などを参考にして以下のように4つの意味的範疇に分類することができる。

- 1) 対象のタクソミーにより決定される助数詞
- 2) 対象の形状により決定される助数詞
- 3) 対象に対する動作によって決定される助数詞
- 4) 対象を納める容器によって決定される助数詞

1)の<タクソミー助数詞>は、数えられる対象の事物に対する基本的な分類(言語・民俗的な分類)を反映したものであり、助数詞の中では類別詞として最も上位に位置する意味範疇である。2)の<形状助数詞>は、対象の事物の物理的な形状に着目したものである。3)の<動作助数詞は>は、数えられる対象の事物が作成される際に、あるいは現在の形状に至る過程において、行なわれる動作を反映したものである。4)の<容器助数詞>は対象の事物を数える際の容器を指示する名称が助数詞として用いられているものである。この<容器助数詞>の場合は、類別詞として対象の事物本来の意味特徴をあまり反映することがなく、むしろ計量詞に近い性格を持っている。これらの種々層の助数詞が同一の対象に対して複数用いられることもあるが、このことは

類別詞として対象を分類するときに複数の意味範疇による把握の仕方が存在しうることを物語っている。

3. 助数詞の記述

上記の分類にしたがって、以下に波照間方言の助数詞の形態と意味を記述する。助数詞は形態素表記を行ない、その異形態は音素表記をした。特に断わらない限り、その他の語例はすべて音声表記とするが、これらの波照間方言の音韻体系については、大野（1988）・平山（1983・1988）を参考にされたい。音声表記に際しては、かぎ〔……〕を省略する。また波照間方言に顕著な無声化についても、音韻的なものでない限り省略する。理解の便宜のために〈……〉には相当する共通語表現を表記する。

3.1 タクソノミーにより決定される助数詞

(1) {ri} …… 人間<=人>。

pīturi (1～) futari (2～) mitari (3～) jutari (4～)

pītu (人) を数える時の他に、?ujapitu (先祖) ・?i:be: (位牌) に対しても拡張して用いられる。五人以上の時は、実質名詞を転用して -pītu を用いる。

(2) {gara} …… 動物など<=匹>。

音韻的に条件づけられる異形態として、/rra/ (無声化しない母音の後につき融合) ・ /kara/ (無声化した母音の後) ・ /gara/ (上記以外) がある。

pīto:ra (1～) futā:ra (2～) mi:gara (3～) ju:gara (4～) ?isikara (5～)
nngara (6～) nanagara (7～) ja:gara (8～) hakona:gara (9～)
tukara (10～)

?usi (牛) ・mman (馬) ・?inu (犬) ・ma:ju (猫) ・?usagi (兎) ・pimidza (山羊) などの動物の他に、turi (鳥) ・goka (鶏) ・ju: (魚) ・musi (虫) ・taku (蛸) ・?i:ga: (烏賊) などに対して用いられる。

(3) {mutu} …… 植物

pītumutu (1～) futamutu (2～) mi:mutu (3～) ju:mutu (4～) ?itsimutu (5～)
nmmutu (6～) nanamutu (7～) ja:mutu (8～) hakona:mutu (9～)
tu:mutu (10～)

pa:jase: (葉野菜) ・nan (菜っぱ) ・negi (葱) ・futsa・futsandani (草) などの草本植物の他に、ki: (木) ・taki (竹) などの木本植物に対して用いられる。

(4) {sīn₁} …… 植物の実などに対して用いられる (注5)。

pītusīn (1～) futasīn (2～) mi:sīn (3～) ju:sīn (4～) ?itsisīn (5～)
nnsīn (6～) nanasīn (7～) ja:sīn (8～) hakona:sīn (9～) tutsīn (10～)

fɯnabu (蜜柑の実)・kɯnabu (野葡萄の実)・mandʒo: (パパイヤの実)・tokkiN (小さな種のばんしろうの実)・baNfuru (大きな種のばんしろうの実)・ba:sanuna:rɪ (バナナの実)などの果実や、go:ja (苦瓜)・ʔuriN (胡瓜)・kabutʃa (南瓜)などの実野菜、de:gumi (大根)・ʔagade:guni (人参)・mudzɪ (里芋)・ʔagan (薩摩芋)などの根菜類などに対して用いられる。

(5) {ɾna}・・・fɯni (舟) <= 隻 >

形態的に条件づけられる異形態として、/noɾna/ (6以上の数に対して)・/ɾna/ (上記以外について融合)がある。

pito:na (1～) futo:na (2～) mjo:na (3～) jo:na (4～) ʔitso:na (5～)
muno:na (6～) nanano:na (7～) ja:no:na (8～) hakonano:na (9～)
tuno:na (10～)

(6) {tan}・・・ɲunu (布) <= 反 >

ittan (1～) nitan (2～) santan (3～) jontan (4～) gotan (5～) ru-
kutan (6～) nanatan (7～) hatʃitan (8～) kju:tan (9～) juttan (10～)

共起する数表現も共通語的であることから、この助数詞形態は新しい共通語的表現と考えられる。

(7) {masi}・・・tanaga (田)・pite (畑)

pitumasi (1～) futumasi (2～) mi:masi (3～) ju:masi (4～)
ʔitsimasi (5～) ɲumasi (6～) nanamasi (7～) ja:masi (8～)
hakona:masi (9～) tu:masi (10～)

(8) {giburi}・・・ci: (家) <= 軒 >

音韻的に条件づけられる異形態として、/kiburi/ (無声化した母音の後)・/giburi/ (上記以外)がある。

pite:giburi (1～) fute:giburi (2～) mi:giburi (3～) ju:giburi (4～)
ʔisikiburi (5～) ɲgiburi (6～) nanagiburi (7～) ja:giburi (8～)
hakona:giburi (9～) tukiburi (10～)

1軒と2軒に相当する部分の数詞部分に通常と異なる形態が現われているが、その条件は不明である。

(9) {sina}・・・料理の品数 <= 品 >

pitusina (1～) futasina (2～) mi:sina (3～) ju:sina (4～) ʔitsisina
(5～) ɲsina (6～) nanasina (7～) ja:sina (8～) hakona:sina (9～)
tusina (10～)

(10) {musi}・・・行事

pitumusɪ (1～) futamusɪ (2～) mi:musi (3～) ju:musi (4～)

?itsimusī (5～) nnmusī (6～) nanamusī (7～) ja:musī (8～)

hakona:musī (9～) tumusī (10～)

拝所の kangjo:dzi (神願い) や、ni:bitfijoi・?aina:joi (結婚式) などの joi (祝い) を数えるのに用いる。

(11) {gi} …… 食事

音韻的に条件づけられる異形態として、/ki/ (無声化した母音の後) ・/gi/ (上記以外) がある。

pītugi (1～) futagi (2～) mi:gi (3～) ju:gi (4～) ?isiki (5～)

ūngi (6～) nanagi (7～) ja:gi (8～) hakonagi (9～) tuki (10～)

(12) {paŋ} …… ?ijagu (權)

pītupa: (1～) futapa: (2～) mi:pa: (3～) ju:pa: (4～) ?itsipa:

(5～) ūnpa: (6～) nanapa: (7～) ja:pa: (8～) hakonapa: (9～)

tupa: (10～)

pa: は本来は「葉」であると言われる。權とその形状が似ているところから助数詞として用いられたものと考えられるが、対象が權に限られるところから<タクソノミ-助数詞>と考えられる。

3.2 形状により決定される助数詞

形状助数詞はすべて無生物(扱い)のものに対して用いられている。

(1) {ira} …… 平たい形状のもの<=枚>

音韻的に条件づけられる異形態として、/rra/ (母音の後について融合) ・/ira/ (上記以外) がある。

pītē:ra (1～) futē:ra (2～) mī:ra (3～) juīra (4～) ?itsē:ra (5～)

muīra (6～) nanē:ra (7～) jāira (8～) hakonē:ra (9～) tuīra (10～)

kapī (紙) ・?e: (絵) ・fajin (写真) ・jadu (戸) ・nagajadu (障子) ・tatame: (畳) ・ka:ra (瓦) ・sara (木皿) ・kudzara (瀬戸物の小皿) ・sure: (瀬戸物の大皿) などの形状が平たいものの他に、na:bi (鍋) ・paŋgama (釜) ・ma:rī (椀) ・saban (茶碗) などのように素材の形状が平たいものを数えるときにも用いる。

(2) {sīN₂} …… 細長い形状のもの<=本>

pītusīN (1～) futasīN (2～) mi:sīN (3～) ju:sīN (4～) ?itsīsīN (5～)

ūnsīN (6～) nanasīN (7～) ja:sīN (8～) hakona:sīN (9～) tutsīN (10～)

?itu (糸) ・parī (針) ・bu: (紐) ・jo:dzi (簪) ・du: (櫓) ・so: (竿) ・bo: (棒) ・pin (笛) ・futji (筆) ・ki: (材木) ・para (柱) ・kamagu (蒲鉾) ・katsu:busi (鯉節) などに対して用いられる。

(3) {gu} …… 丸い形状のもの

音韻的に条件づけられる異形態として、/ku/（無声化した母音の後）・/gu/（上記以外）がある。

pitugu (1～) futagu (2～) mi:gu (3～) ju:gu (4～) ?isiku (5～)
 nngu (6～) nanagu (7～) ja:gu (8～) hakonagu (9～) tuku (10～)
 ?i: (お握り)・mutsi (餅)・kē: (卵)・kandzume (缶詰)・saki (<壺入りの>酒)
 ・kami (瓶)・supu (壺) などの丸く固いものに対して用いられる他に、junta (ユンタ)・
 ?ajagu (アヤゴ)・dʒiraba (ジラバ) などの歌謡を数えるときにも拡張的に用いられている。

(4) {metu} …… 二つで一組になっているもの<=揃い>

pitumetu (1～) futametu (2～) mi:metu (3～) ju:metu (4～)
 ?itsimetu (5～) nnmetu (6～) nanametu (7～) ja:metu (8～)
 hakona:metu (9～) tumetu (10～)

対象の直接的形状とは関係なく、二つの物が組み合わさって使用されるような形態の、sapan (草履)・?asita (下駄)・kutsu (靴)・ma:sī (箸) などに用いられる。

3.3 動作により決定される助数詞

動作助数詞はすべて無生物 (扱い) のものに用いられている。

(1) {kisi} …… 切ることによる。

pitukifi (1～) futakifi (2～) mi:kifi (3～) ju:kifi (4～) ?itsikifi
 (5～) nṅkifi (6～) nanakifi (7～) ja:kifi (8～) hakona:kifi (9～)
 tu:kifi (10～)

to:fu (豆腐) などのように、切るという動作によって、数えられる単位が作成される対象に対して用いられる。

(2) {sihuku} …… 握ることによる。

pitufifuku (1～) futafifuku (2～) mi:fifuku (3～) ju:fifuku (4～)
 ?itsififuku (5～) nṅfifuku (6～) nanafifuku (7～) ja:fifuku (8～)
 hakona:fifuku (9～) tu:fifuku (10～)

bīra (韭)・?a_N (粟)・mē: (米) などを収穫するときに、握るという動作によって作成される一握りの単位をいう。

(3) {sipuri} …… 束ねることによる。

pitusipuri (1～) futasipuri (2～) mi:sipuri (3～) ju:sipuri (4～)
 ?itsisipuri (5～) nṅsipuri (6～) nanasipuri (7～) ja:sipuri (8～)
 hakona:sipuri (9～) tu:sipuri (10～)

?a_N (粟) を収穫するときに、上記の 6 fīfuku を束ねることによって作成される一束ねの単

位をいう。

(4) {sika} ……束ねることによる。

pītusika (1～) futasika (2～) mi:sika (3～) ju:sika (4～) ?itsisika
(5～) n̄nsika (6～) nanasika (7～) ja:sika (8～) hakona:sika (9～)
tu:sika (10～)

mē: (米) を収穫するときに、上記の 2 fufuku を束ねることによって作成される一束ねの単位をいう。

(5) {marisi} ……抱えることによる。

pītumarisi (1～) futamarisi (2～) mi:marisi (3～) ju:marisi (4～)
?itsimarisi (5～) n̄nmarisi (6～) nanamarisi (7～) ja:marisi (8～)
hakona:marisi (9～) tu:marisi (10～)

?an (粟) の収穫では上記の 10 sipuri を、mē: (米) の収穫では上記の 10 sika を、それぞれ一抱えにまとめることによって作成される単位をいう。また ?amasina (砂糖黍) や ta:mu-nu (薪) などについても、一人で抱えられるだけの量をいう。

(6) {huci} ……口を開くことによる。<=口>

pītufutsi (1～) futafutsi (2～) mi:futsi (3～) ju:futsi (4～)
?itsifutsi (5～) n̄nfutsi (6～) nanafutsi (7～) ja:futsi (8～)
hakona:futsi (9～) tu:futsi (10～)

食事を取るときの一口をいう。

(7) {kuci} ……口を開くことによる。<=節>

pītukutsi (1～) futakutsi (2～) mi:kutsi (3～) ju:kutsi (4～)
?itsikutsi (5～) n̄nkutsi (6～) nanakutsi (7～) ja:kutsi (8～)
hakona:kutsi (9～) tu:kutsi (10～)

歌謡の一節を歌うことをいう。上記の futsi と語源的には同じと思われる。

3.4 容器により決定される助数詞

容器助数詞はすべて無生物(扱い)に対して用いられている。

(1) {mari} ……椀に盛るもの

pītumari (1～) futamari (2～) mi:mari (3～) ju:mari (4～)
?itsimari (5～) n̄nmari (6～) nanamari (7～) ja:mari (8～)
hakona:mari (9～) tu:mari (10～)

?i: (ご飯)・ssu (汁)・soba (そば) などの食品についていう。

(2) {zin} ……膳に盛るもの

pītudz̄in (1～) futadz̄in (2～) mi:d̄zin (3～) ju:d̄zin (4～)

?itsidʒiN (5～) ɲndʒiN (6～) nanadʒiN (7～) ja:dʒiN (8～)
hakona:dʒiN (9～) tu:dʒiN (10～)

?siki (ご馳走) などについていう。

(3) {paku} ……箱に入ったもの

pitupaku (1～) futapaku (2～) mi:paku (3～) ju:paku (4～)
?itsipaku (5～) ɲnpaku (6～) nanapaku (7～) ja:paku (8～)
hakona:paku (9～) tu:paku (10～)

箱に入ったままの to:fu (豆腐) などについていう。

(4) {sjaɾ} ……一升枧で量るもの

pitufa: (1～) futafa: (2～) mi:fa: (3～) ju:fa: (4～) ?itsifa: (5～)
ɲɲfa: (6～) nanafa: (7～) ja:fa: (8～) hakona:fa: (9～) tu:fa: (10～)
fa: とは一升枧のことである。?an (粟) ・ mē: (米) ・ mami (豆) ・ sitatsi (醤油) など
に用いる。

別の形態として {su} も用い、異形態として /su・cju・sina/ がある。その場合は数詞部分の
形態も異なる。

?issu (1～) nisu (2～) sansu (3～) ju:su (4～) gusu (5～) rukutfu
(6～) nanasina (7～) ja:sina (8～) hakona:sina (9～) ?ittu (10～ < 1
斗 >)

(5) {namori} ……一合枧で量るもの

pitunamori (1～) futanamori (2～) mi:namori (3～) ju:namori (4～)
?itsinamori (5～) ɲɲnamori (6～) nananamori (7～) ja:namori (8～)
hakona:namori (9～) tu:namori (10～)

namori とは一合枧のことである。?an (粟) ・ mē: (米) ・ mami (豆) ・ ma:su (塩)
などに用いる。

(6) {taru} ……樽に入れるもの

pitutaru (1～) futataru (2～) mi:taru (3～) ju:taru (4～) ?itsitaru
(5～) ɲɲtaru (6～) nanataru (7～) ja:taru (8～) hakona:taru (9～)
tu:taru (10～)

精糖時の樽に入った sata (砂糖) についていう。

3.5 その他

上記の助数詞以外に、類似する計量詞として下記のものを用いられている。

(1) {tu} …… < = 斗 >

saki (酒) ・ ?aba (油) ・ mi:fu (味噌) などを量るのに用いられる。

(2) {barsi} …… <=升>

saki (酒) ・ ?aba (油) を量るのに用いられる。

(3) {gor} …… <=合>

saki (酒) ・ ?aba (油) を量るのに用いられる。

(4) {'iru} …… <=尋>

深さ・高さ・距離などを量るのに用いられる。

(5) {se} …… <=畝>

田畑の面積を量るのに用いられる。

(6) {gutsi}

田畑の面積を量るのに用いられる。

(7) {kin} …… <=斤>

sisi (肉) ・ sa: (茶) ・ kubu (昆布) などを量るのに用いられる。

4. 助数詞の意味構造

以上の助数詞の記述より、波照間方言の助数詞の意味体系を構造づけている基準として以下の諸点をあげることができる。

- タクソノミーとしてマークされている特徴
 - 生物 (扱い) としてマークされているタクソノミー
 - 人間…………… {ri}
 - 動物…………… {gara}
 - 無生物 (扱い) としてマークされているタクソノミー
 - 植物…………… {mutu}
 - 植物の実…………… {sin₁}
 - 舟…………… {rna}
 - 布…………… {tan}
 - 田…………… {masi}
 - 家…………… {giburi}
 - 料理…………… {sina}
 - 行事…………… {musi}
 - 食事…………… {gi}
 - 權…………… {par}
- 形状としてマークされている特徴
 - 平たい…………… {ira}
 - 細長い…………… {sin₂}

- 丸い（硬い）…… {gu}
- 組になっている… {metu}
- 動作としてマークされている特徴
 - 切る…………… {kisi}
 - 握る…………… {sihuku}
 - 束ねる…………… {sipuri} {sika}
 - 抱える…………… {marisi}
 - 口を開く…………… {huci} {kuci}
- 容器としてマークされている特徴
 - 椀…………… {mari}
 - 膳…………… {zin}
 - 箱…………… {paku}
 - 一升枀…………… {sjar} {su}
 - 一合枀…………… {namori}
 - 樽…………… {taru}

波照間方言の話し手たちは、上記のような諸特徴に着目することによって、類別詞として助数詞を使い分けているわけである。

注1) 同じ琉球方言圏である沖永良部島知名町方言においても、助数詞を用いずに基数詞そのもので数量表現をするこのような傾向が著しいことは、久野（1985）に報告がある。

注2) Haas（1942）によれば、このような実質名詞の助数詞転用はタイ語において多く見られることが報告されている。また久野（1985）に、沖永良部方言においてこのような転用が若干例見られることが報告されている。

注3) 概念範疇を知る手がかりとしての類別詞の重要性の指摘は G. Lakoff による。Lakoff はその例証としてオーストラリアの Dyirbal 語の類別詞の他に、日本語の助数詞“本”を類別詞としてあげている（Lakoff 1987）。

注4) Hass（1942）・Berlin & Romney（1964）などを参考とした。

注5) この〈タクソノミー助数詞〉としての {siN₁} と、後述する〈形状助数詞〉としての {siN₂} とを、同形態ではあるが異なる意味を表す別個の形態素と考える理由は次の通りである。

- {siN₁} の対象事物である植物の実などには、細長い形状のものもあるが丸い形状のものも多いので、{siN₂} の意味にそぐわない。
- 両形態素の対象の範囲の限定性（狭さ）から、両者を統合して無生物を表す総称 {sin} をたてることができない。

- 大野(1988)にあるように現在の波照間方言の/si/の拍は歴史的には/ki・ci・cu・si・su/などの拍が音変化をこうむってできたものであり、そのことを勘案すると {sɪN₁} と {sɪN₂} が同形態素ではない蓋然性が残る。

参考文献

- Berlin, B. & A. K. Romney 1964 Descriptive semantics of Tzeltal numeral classifiers. *American Anthropologist*, 66.
- Haas, M. R. 1942 The use of numeral classifiers in Thai. *Language*, 18.
- 平山輝男編著 1983 『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』(桜楓社)
- 平山輝男編著 1988 『南琉球の方言基礎語彙』(桜楓社)
- 影山太郎 1987 「語彙の比較とプロトタイプ」(『日本語学』6-10)
- 久野マリ子 1985 「奄美方言の数を表す接尾辞 — 沖永良部島知名町の場合 — 」(法政大学 沖縄文化研究所『琉球の方言』10)
- Lakoff, G. 1987 *Women, Fire, and Dangerous Things*. The University of Chicago Press.
- 大野眞男 1988 「琉球波照間方言の音対応と音変化」(『岩手大学教育学部研究年報』48-2)
- 大野眞男 1989 「語彙の比較研究におけるプロトタイプ論の可能性 — 琉球諸方言の語彙研究から — 」(『岩手大学教育学部附属教育工学センター 教育工学研究』11)
- Sanches, M. 1977 Language acquisition and language change ; Japanese numeral classifiers. In *Sociocultural Dimensions of Language*, Blount, B. G. ed., Academic Press.
- (岩手大学教育学部)